

図書だより

〈第13号〉

昭和60年10月15日
 呉工業高等専門学校
 図書委員会



目 次

1. あいさつ	図書主任	藤井 健	2
2. 「友情」(武者小路実篤)	1 M	浮田 正義	3
3. 「海と毒薬」(遠藤周作)	1 E	桜井 幸二	3
4. 「原子力発電」(武谷三男)	1 C	藤本 英治	4
5. 「二十四の瞳」(壺井栄)	1 A	植野 桂子	5
6. 「ビルマの豎琴」(竹山道雄)	2 M	有原 勝	6
7. 「オイディプス王」(ソポクレス)	2 E	木村 憲明	6
8. 「変身」(カフカ)	2 C	阿部 貴士	7
9. 「野菊の墓」(伊藤左千夫)	2 A	二宮 偉	8
10. 「饗宴」(プラトーン)	2 C	塩田 純次	9
11. 「クリトーン」(プラトーン)	2 M	笠原 利治	11
12. 「図書室での学生の態度」	4 M	東川 浩二	12
13. 「小説のこと」	5 A	貞岩 雅彦	12
14. '85 ワールドカップマラソン	教務主事	堀 武夫	14
15. 本を選ぶ	機械工学科	鍋本 暁秀	16
16. 私とツンドク	土木工学科	藤原 章正	17
17. 図書委員会からのお願い			19
18. 新着図書案内			19
19. 編集後記			24

「あいさつ」

図書主任 藤井 健

今年から図書のお世話をするようになった。図書主任の仕事は、一人でも多くの学生に、心底から感動し、豊かな感性を育てるような良書に巡り会ってもらうこと、また授業では不十分な点を自主的に勉強し、研究できるだけの態勢を整えることだと考えている。

就任早々、文部省から昨年比20%減という極めて厳しい図書購入費の配分があったが、校長ならびに部課長の好意で校内でかなりの手当をしていただき、諸君と共に感謝したい。昨年までの図書予算でも不足で、ある学科では何年かにわたり、研究費の一部を学生用図書購入費に充てたりしてきた。特に技術革新の著しい分野では、10年前の本は役に立たないものも多く、工業高専の図書室としては新しい内容の図書や教養的な図書はどうしても購入する必要がある。そのために予算の減額は何としても止めてほしいが、それに最も効果を発揮するのは、利用の「実績」と利用者からの「声」である。

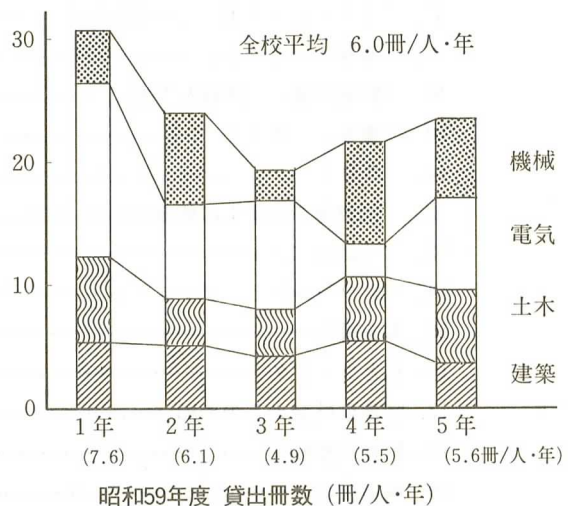
昨年は5年生の担任として就職のあっせんをしたが、会社側からは「高専の学生は専門の方はよくやっているが……」とか「応用力が……」とか、入社試験を受けた学生からは「一般教養が……」と聞かされた。この点は以前からも多くの人に指摘されているし、しかも大学生と比べてのことであり、当然年令的なハンディキャップはある。しかし年令的に若いということは、将来の飛躍のステップとなる豊かな情操と幅広い教養を身に付ける時間があるということで、今がそのチャンスではなかろうか。

先日、川尻先生から紹介された「いずみ」という図書に関する小冊子に、今まで読んで最も感動した本に関する調査が載っていた。トップは夏目漱石の「こころ」、次いで「人間失格」、「竜馬がゆく」となっており、読んだ時期は17才が一番多い。諸君の2～3年にかけての年令時である。また読んだ動機は「人にすすめられて」が最も多く、感銘を受けた本に出会うと、その本を他人にすすめたくなることは、諸君も経験していることと思う。



さて本校の図書の利用実態はどうだろう。表紙の写真は7月のある火曜日の「昼時間の図書室」である。多くの学生が熱心に机に向い、あるいは本を選んでいる。上の写真は、同時刻の「図書室の奥では」と「入口は」である。このようなマナーについては諸君の猛省を促したい。

また、図は昨年のクラス別貸出数であり、年間一人平均6冊である。ただクラスによって随分開きがあり、多いクラスは14冊となっている。



読書は、静水上の波紋のように周囲に輪となって広がって行く。今、君にその一石を投じてほしいと願っている。

「友 情」

(武者小路 実篤)

1 M 浮 田 正 義

ぼくは、この本を読んではじめて、本というもののすばらしさを感じました。テレビやマンガ本などでは実際に絵が描かれていて、その絵を見て終わりというようになるけれど、小説というものにはほとんどといってよほど絵はなく、詳細に書かれている文字によって読む人読む人にいろいろな風景を与えてくれ、しかも想像することによってその物語をいっそうおもしろくさせてくれる働きがあると思うし、想像力もつく。とくにこの『友情』ではその場の風景だけでなく主人公の心などこと細かに書かれてあり、まるで主人公になったような気分で読書が出来たのである。

主人公が杉子という女の子に一目ぼれした事によって、この物語は始まったのであるが、最後にふられて終わる結果になろうとは、読者どころか主人公にも分からなかった事だろう。

いろいろと杉子の話を友人に聞かせて自慢するが、その友人は主人公と同じく杉子を好きなのだが友情を重んじ杉子を主人公に近づかせようとする。この文を読んで、ぼくは自分の好きな人を友人のためにあきらめるなんてこんなことをする人があるのかとびっくりした。しかし、杉子は友人の事が好きで、その友人はこのままでは友情がこわれると判断し、外国に出ていってしまった。このあたりまで読んだとき、ぼくは主人公びいきになっていて、「よし、これで主人公と杉子はうまくいくかも知れない。」と思った。

しかし、杉子は友人に手紙を書き、友人のところへ行きたいといった。それを友人がことわり、また杉子が手紙を出す…………。

この繰り返しでどうとう友人が友情を守り通すことが出来ず、恋を選んでしまった。これは仕方がない事だと思った。お互いに好きなのに、友人の事を好きになるようなたのんでも、しまいには意志が曲がってしまうに決まっている。

しかし、友人は主人公に最後の友人としての行動として、その間行われていた手紙のやり取りを全部主人公に送った。そして、主人公はどのような悲しさと怒りがつきあげてきた…………というあらずじだったが、これについて最後に感じたことは、友情を大切にしたいのならお互いにかくし事はしない方がいいという事である。そうする事が本当の友情なのではないかと思った。

この本は、自分の人生の中でたいへん参考になるいい資料にできたと思った。



「海 と 毒 薬」

(遠藤 周作)

1 E 桜 井 幸 二

この文章の時代背景は、人間にとって何の利益にもならない残虐の繰り返しであった第二次世界大戦の真ただ中である。

この「戦争」というものによって変わる人間の考えを、ある病院での出来事を取り上げて巧みに表現している。

文章の中に、「本当にみんなが死んでいく世の中だった。病院で息を引きとらぬ者は、夜ごとの空襲で死んでいく。」というのがある。僕はこの二文を読んで、戦争のむなしさというものが心に焼きついた。

さらに「人々が死のうが、死ぬまいが、気にかける者もなくなった。」という一文がある。この文を読んだ時に、これから先を読んでいくのが恐ろしくなってきた。この後、どんなにすごいことがまっているだろうかとここで、しばらくの間この本を読まないことを決心した。それほどまでに、この一文は、僕に戦争に対する恐怖心を植えつけてしまった。

さらに、文章の中に、「どうせ何をしてもあの暗い海に誰もがひきずりこまれる時代だという諦めがわたしの心を支配していたのかもしれない。」という一文があった。この文を読んで、この先、こんな悲惨なことがたくさん書いてあるんだと開き直ってしまった。開き直ってはいけなかったのだろうか、と鉛筆を走らせていて、ふと思った。

この開き直った僕を再び恐怖の世界へ連れていったのは、ある日の手術である。

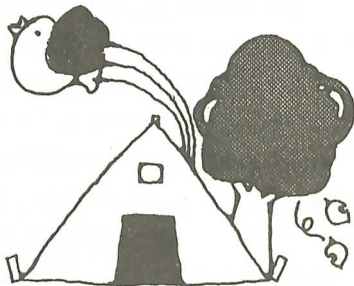
この手術は、米軍捕虜3人に麻酔をかけて、一人一人別の目的によって生体解剖するというものである。第一捕虜に対しては、血液に生理的食塩水を注入し、その死亡までの極限可能量を調査するというもので、第二捕虜に対しては、血管に空気を注入し、その死亡までの空気量を調査するというもので、第三捕虜に対しては、肺を切除し、その死亡までの気管支断端の限界を調査するというものである。

このことは、僕の心の中に再び、「恐怖」という二文字を焼きつけてしまった。

この手術は、医学の発展に関して、極めて重要であったことは僕にも理解できる。しかし、人間として考えるならば、本来、人間にあるべき姿ではないということになる。このような複雑な気持ちが心の中に残ってしまった。

以上が僕の心を激しく貫いた部分である。

このように、遠藤周作という人は、当時のありのままの様子を書き表わすことによって、僕に、戦争というものの恐ろしさを覚えさせてくれた。今、僕は、遠藤周作に対して感謝の念でいっぱいです。



「原子力発電」

(武谷 三雄)

1C 藤本 英治

原子力の歴史は、悲惨な出発となった。広島、長崎での出来事である。その時から、かなりの月日がたつたが、今だに原子力は敵なのである。

この原子力を使う、原子力発電というものが研究されてきた。原子力発電は、原子核エネルギーを使用して、原子炉の中で発生する熱エネルギーで蒸気をつくり、タービンを回して発電するものであるが、まだ、人間のものとはなっていないのである。なぜならば、多くの問題点があるからである。

その問題を考えてみると、まず、放射能と放射能を持つ核分裂生成物である。これは、人々に、支障をきたすものである。これが原子力発電に必ず伴うものである。ところが、それを、処分または永久保管ができないところに問題があるのである。

この問題点があるために、発電所の設置場所も検討しなければならない。ところが、日本もかなり多くの原子力発電所が造られているのだが、アメリカの立地基準にあてはめて見ると、全く基準内にあてはまらないのである。

また、原子力発電所の事故は、一歩間違えば大事故になるのである。だから、立地基準は大変重要なものになってくるわけだが、日本の地勢から考えて、まず、基準内にあてはまるような場所が見あたらないのである。こういう実態であるにもかかわらず、日本の場合、原子力発電所が一地域に集中的に建造されているのである。地勢から考えてしかたがないといえどもそれまでだが、これでは、ますます、事故が起きた場合、大変なことになってしまうのである。またよく考えて見ると、立地基準にあてはまらないといってもこの立地基準はアメリカの広大な地勢の場合を考えてつくられたものである。日本の建造場所は、この基準にもあてはまらないのだから最悪なのである。

日本は、さかんだった石炭産業を捨て、また、石油火力をおいこす勢いで、原子力を重視した新しいエネルギー需要計画を作成しているのである。ところが、日本は、原子力発電に必要なウラン資源はゼロに等し

く、100パーセントが輸入なのである。これほど、外国依存度の高いエネルギー源は他国にはないのである。

以上、述べてきたように、国民に納得されるようなものはないのである。基本的に「公開」、「民主」、「自主」の三原則を忠実にまもる以外に、日本の原子力の将来はなく、住民に納得される道もありえないのである。

「二十四の瞳」

(壺井 栄)

1 A 植野桂子

「昭和3年4月4日、農山漁村の名が全部あてはまるような、瀬戸内海べりの一寒村へ、若い女の先生が赴任してきた」というように物語がはじまる。

これまで岬の分教場へ赴任してくる女の先生は、たいてい女学校出たての新米の先生であるが、今度の大石先生は師範出のバリバリの女教師であり、しかも洋服のハイカラ姿で、ピカピカの自転車に乗ってやってくる。これが、へんびな当時のこの岬の村人や子供達の間、たちまち大評判となる。はじめはハイカラな洋服姿や、女のくせに自転車に乗ってくる大石先生に対して反感や違和感をいだいた村人や子供達も、だんだんこの女教師に親しみを持つようになり、大石先生も無邪気な12人の生徒に取りまかれ、ひとりひとりのふところの中にまではいりこんでゆけるようになって、その日その日の勤めに、この上もない喜びと生きがいを感じる。

それは、これまでの多くの教師に見られるように、ただ教壇から生徒に教えるといったような、通りいっぺんの関係でなく、先生と生徒が、お互いに心を全部開き合い、人間的に触れ合い、溶け合って一体となるという、教師像をここに描き出している。

さて、この物語の中で、一つの小さな事件が起こる。それは第2学期のはじめ、嵐で荒らされた村の浜辺へ生徒達を連れ出し、ガヤガヤと楽しいひと時を過ごしていた時、子供がいたずらに作った落とし穴に大石先生が落ちてアキレス腱を切り、とうとう学校を休まねばならなくなる。その後、何日たっても先生は学校へ姿を見せず、生徒達は毎日毎日先生の見えるのを、心をうずかせるように待っているのだが、ついに待ちき

れず、ある日、みんな親達にないしょで、岬から8キロもある大石先生の家を訪ねて行く。まだ1年生の足では8キロの道はあまりに遠く、行けども行けども大石先生の家までたどりつくことができず、途中で泣き出す者さえ出てくる。

村では夕暮れとなってもだれ1人帰ってこないで、親達の間で大騒ぎとなる。生徒達はもうこれ以上歩けぬほど疲労してしまって、途方に暮れているところへ、松葉杖姿で医者通いの帰りのバスから大石先生が降りてくるのに出会って、やっと救われた気持ちになり、一同大石先生の家へ誘われ、うどんをごちそうになり、この村の名物の一本松の巨木の下で記念写真を撮る。小さな12人の生徒達が先生を慕うあまり、このような小さな冒険をあえて企てたということは、大石先生と、これをとり巻く12人の子供達とが、いかに心と心とを深く通い合わせていたかを物語る何よりの証拠であり、この物語の中の一つの大きな山である。



- 「図書室では静粛に」
- 「読んだ本はもとの位置へ」
- 「帯出期間を守ろう」



- 「図書室での飲食はやめよう」

「ビルマの豎琴」

(竹山 道雄)

2M 有 原 勝

僕が「ビルマの豎琴」を読む気になったのは、今年映画化されたという全く安直な考えにすぎませんでした。「ビルマの豎琴」は、「赤とんぼ」という児童向けの読み物だそうですが、18に近い僕が読んでみても考えさせられるところが多く、戦争がいかに悲惨なものであり、無益なものであるかがわかるように書かれていると思われました。

「ビルマの豎琴」という題の豎琴というのは、水島上等兵が持っていた豎琴です。うれしい時でも、つらい時でも、豎琴に合わせて隊のみんなで歌い、またシヤムへ行く途中、森があれば、水島が豎琴を持ち、ビルマ僧の格好をして入って行き、敵がいる時は、敵がいるぞと知らせる歌を決めておき、その歌を奏で、また、敵がいなくても大丈夫来てもいいぞと知らせる歌を奏でるという大きな役割を持っています。また、ある時にはビルマ人の部落で歓迎されて、気が付くとビルマ人はだれ1人おらず広場の周りの森の中に敵が銃をかまえていたときにも、敵に安心させるために豎琴に合わせて合唱していたのですが、その合唱していた歌がその敵の国の故郷を思う歌であったためにあちらこちらで合唱が起こり、ついには、その豎琴に合わせてお互い敵どうしが肩をくみ合い歌い出し戦いがなくなり、その後で日本が負け、戦争が終了したことを知り、むだ死にをしないですみました。僕はここを読んで感動しました。たとえこれが本当の事でもなくともこういうことがあって欲しいと思います。またこのようなことが本当にあったんだと思いたいです。音楽という芸術によって、このような奇跡が起きてくる可能性は十分あると思います。また全ての人々がこのように豊かな心の持ち主であつたらいいと思います。

それから、隊が日本に帰るとき捕虜収容所の前によくく水島によく似たビルマ僧が、実は本当の水島だとわかったのもその僧が豎琴をひいたことからでした。このようないろいろな大事なことを引き起こしたのが豎琴であったためにこの題がついたのだと思いました。

「ビルマの豎琴ができるまで」によるとこの話はフ

クションだそうです。しかし、僕はこの話を読んでいる時とても夢中にさせられていました。フィクションだなんてとても思えませんでした。それもそのはずでした。この話には示唆になった話があるそうです。それから、終戦直後のビルマの様子も当時の情報の少ない時代でも探し出してわかり、これにはビルマ全国に日本兵の白骨が累々と野ざらしになっていることも書くきっかけとなった一つだそうです。だから水島上等兵がビルマ僧となり、野ざらしになった日本兵の死体の墓を作り供養するためにビルマに停まるという筋書きになったのでした。僕はこのような人物があつた時代に本当にいたらよかつたと思いました。

この本の中にはいろいろな人の感情が描かれていると思います。友情、死への恐れ、友が生きていたとわかつた時の喜び、どれもよく書かれていると思ひました。



「オイディプス王」

(ソポクレス著・藤沢令夫訳)

2E 木 村 憲 明

この物語は、テバイの王オイディプスが、自分の運命を前もって知りながらそうであることがわからないうちに、父を殺し、母を妻とし、その間に子をもうけるという罪をおかし、そのことを計らずとも知つてしまい、自分自身を呪う、といった悲劇である。この作品は、ソポクレスの全作品中、最高傑作であるといわれており、解説によれば、「この作品は彼の文体の変化の第3期、性格表現に最も適した最良の文体を用いるようになった時期のもので、中でもソポクレスの最も円熟した時期の作品であろう。」とのことである。この作品の悲劇としての柱は、オイディプスの犯した父殺

し、母との結婚といった恐い事実の発見、そして、その発見による運命の逆転であり、このことが登場人物の意志によってひきおこされている。つまり、登場人物が、よい結果となることを望んで起こした事がかえって悲劇のもとを作っているということである。例えば、そもそもオイディプスが自分の罪を発覚させたのも、テバイの都の災厄をはらうため、予言者テイレスiasを呼び彼がオイディプスの不幸を思い口を閉ざそうとしたものを、オイディプスが自らの意志により無理に聞きだそうとしたのが原因である。これによりオイディプスは自ら悲劇の幕を開けてしまった。

また、オイディプスの妻イオカステがオイディプスを安心させようとして言ったことよりオイディプス自身がライオス殺害の犯人ではないかという疑惑がおこり、かえってオイディプスの心を乱す結果となる。このように、この作品では、登場人物がよかれと思って行ったことが裏目にでることからいっそう悲劇としての色が強められる。

さらに、悲劇をひき起こすような人物・状況設定について、アリストテレスのいうところによると、「こうしてみると、人物の設定としてのこるのは、以上の中間にあるような場合である。それはどのような人物かという点、徳と正義において特別にすぐれているというわけではなく、しかしまた自分の悪徳や邪悪さのために不幸になるのでもなくて、ある過ちのために不幸になるような人であり、大いなる名声と幸運のうちにある人物のひとりでなければならぬ。」と、オイディプス王はまさにその条件に適する人物である。

そして、この作品での恐い行為が近親関係を持つものたちの間で行なわれたことについて「その人物がこの種の行為を果しながらも自分が恐いことをしたとは知らずにいてあとになってから相手との近親関係を発見するという場合もありうる。」「この場合には、ひどいことだと憤慨させるようなものはないし、しかも、真相の発見はわれわれを愕然とさせる。」と説明されている。

以上のように、この作品は、物語の強さにより、より感動的になっている。

「変身」

(カフカ著・高橋義孝訳)

2C 阿部貴士

この私が読んだ「変身」はとても奇怪な小説だ。ある朝この小説のグレーゴル・ザムザは自分が一匹の巨大な虫に変身しているのに気付く。巨大な虫とは、人間がそのまま虫になったくらい大きさで、太い胴体とそれに付いている無数の足がある、むかでのようなものだ。

この「変身」という小説はとても不思議である。読んでいくなかであまりにも普通の出来事のように描かれているので、何気なく読んでいると不思議な出来事を当たり前の出来事のようにとらえてしまいそうだ。

まず第一にこの小説の主人公のグレーゴルが虫に変身することである。人間が動物に変身することは童話の世界でならまだしも、普通の世界ではありえない。

第二の不思議はグレーゴルが変身した姿を見て周囲の人々が誰もこの異変に不審を抱かないことである。家族も、関係する人々も、この出来事は当然のことながらありうることだと考えている。グレーゴル自身も自分にふりかかったこの異変をあまり深く考えこんではいない。実に最初は楽観的でじきに元の姿にもどるものとして考えていて、頭の中は、仕事の事ばかりで異変については簡単に済ませている。

第三に不思議なことはカフカがこの人間がなぜ虫に変身したかをまったく説明していないことである。だから読者はこのような奇怪な事実を面前にして、ただ困惑し、自分の気持ちを整理することができないまま、各々勝手に考えうるかぎりの様々の解釈を行ってみるのである。

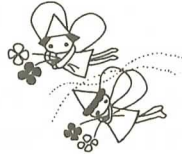
そこで解説の1ヶ所にある文で「…とても読めたものではない結末、ほとんど細部にいたるまで不完全だ。出張によって妨げられなかったら、もっといいものができていただろう。」とカフカ自身もコメントしているので紹介した。



グレーゴルはセールスマンとしての職を拒否し、自由に生きたいと考えている。しかし彼自身、そのように自由に振る舞うことができない彼の苦悩が表現されている。このことは実際の彼の生活の中で生まれたものだ。

結局、グレーゴルは父親が投げた林檎の傷が致命傷となって死ぬ。はじめのグレーゴルに対しての家族の対応はよく分からないうちに済ましていたが、次第にグレーゴルは家族から見放されてしまい正気の沙汰ではなくなってしまう人も出てくる。そして父親が殺してしまう結果になってしまう。

この「変身」の巨大な虫はいったい何におかれるものなのか、精神的に危機に陥りそうになるところから出てきたものなのか、矛盾だらけの世界の中の一つの悩みを表したものなのか、よく分からないけれど、難しくもあり、幾通りにも答えがありそうな感じがする。



「野菊の墓」

(伊藤左千夫)

2 A 二 宮 偉

「野菊の墓」は、歌人でもある伊藤左千夫が最初に発表した小説である。「ホトトギス」に発表され、さらにその年に俳書堂から単行本として「野菊の墓」が出版された。伊藤佐千夫、生前の唯一の単行本出版で、その年、43歳であった。

この小説の概要は、田園生活を背景とし、数え年15歳の政夫と、2つ年上の民子との2人の中の、清純きわまりない恋愛を描いたもの。2人の恋は周囲の干渉により、政夫は千葉の中学校へ、民子は、いやいやながら他へ嫁ぎ、政夫を想うあまり病死してしまう。政夫は民子の墓へ参り、辺り一面に、民子の好きだった野菊を植えるという話である。

2人の別れからラストにかけては、涙なくしては読めない箇所が多い。そういう気持ちをそそるのは、前半に描かれている2人のいじらしいほどの純愛のため

であろう。数え年で15と17と言え、実際14歳と16歳で、政夫はまだ今でいう中学2年生である。松田聖子の映画で有名になった箇所、「民さんは野菊の様な人だ」と政夫が言う場面がある。そして、僕は野菊が大好きだと言う。この何げない会話が、好きあっているながらも、互いの気持ちをよく確め合っていない2人なので、偶然にも政夫の告白のようになり、2人の心が大きくゆれたのだった。それ以来何も言えなくなってしまう2人。とてもいじらしく、幼く思える。また2人の想いの確かさを改めて感じる。

そんな2人にもいよいよ別れが訪れるのである。矢切の渡での別れ。咽がつかまって何も言えない政夫、手のやり場に困り、眼に涙を持っているのをお増に見られまいとする民子。

そうして政夫は学校へ行き、民子を想いつつ勉強する。民子は、実家へもどされ、結婚を強いられてしまい、やがて病気になる、手に政夫の写真と政夫あての手紙をにぎって死んでいってしまう。結婚しながらも、これほどまでに政夫を想う民子のことを考えるとかわいそうで涙の出る想いがする。まだ愛情の深さにも感心する。また民子の墓に参る政夫が、墓石の周りを7日間通いつめて、野菊でいっぱいにした姿を見て、民子の想いに劣ることのない愛情に感動する。

このようにこの小説は、読む人みんなに感動を与えてくれるだろう。読む人それぞれ感じることは違うと思うが、青春時代のうちにぜひ一度読んでみてはどうだろうか。僕は、とにかく、2人の愛情物語にほのぼのし、2人の想いの深さに感動した。



「饗宴」

(プラトーン著・森進一訳)

2C 塩田純次



1 「饗宴の内容」

まず、この作品は倫理社会の時間に習ったように対話篇で書かれている。そして、当然のことながら、プラトンの師であるソクラテスも登場する。この饗宴は紀元前 416年、アガトーンの第1回優勝祝賀会の翌日にアガトーンの家で催されたものと設定されており、そのときのソクラテスの年齢を54才として話を進めてある。

この話のあらすじをおおまかに書き記してみると、悲劇詩人アガトーンの優勝を祝う酒席で彼の5人の仲間達がそれぞれ愛とは一体何であるかを問題として、愛の神であるエロースを讃美する即席演説を試みるどころから始まり、ひととおりの演説が終わってからソクラテスによる美や愛のアイデア論の話でとじるようになっていく。

まず「愛」について説く5人を記すが、アガトーン、エリュクシマコス、パイドロス、パウサニアース、アリストパネース（演説の順でない）以上の人物が語っている。まずこの5人の簡単な人物紹介をするが、アガトーンは、アテーナイの悲劇詩人ですぐれた美貌の持主で、ソフィスト（後期のソフィスト）特にゴルギアス、プロジコスの影響を受けた人物である。

エリュクシマコスは、医者でこの本文では、饗宴のプログラム進行係を務めている。

パイドロスは、上のエリュクシマコスなどと一緒にソフィストであるヒッピアースをとりまく1人として登場している。

パウサニアースについては、何物かよくわからないが、彼もまたソフィストに心酔している人物の1人である。

アリストパネースは、授業でも習ったが、ギリシア最大の喜劇作家で、当時のソフィストに対して、皮肉を言い、とくに、ソクラテスを最大のソフィストとして皮肉っている人物である。この人物達が様々な意見を述べている。

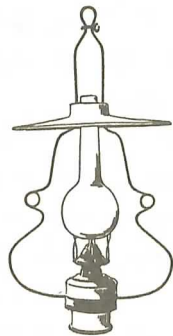
彼等の述べたことを簡略化して書くと、まず、パイ

ドロスは「愛の神（エロース）は神々の中でももっとも齢が高く、もっとも高い誉れをもち、また生者死者を問わず、人間を徳と幸福の所有へ導く力をすぐれてもちたもうた神」と主張している。パイドロスの次に語ったのはパウサニアースであるが、この両者は先の人物紹介にも書いたようにソフィストを心酔しているため、そんなに意見に違いがあるようには見えない。ただし、パイドロスに自分の意見のほうが正しいのだという感じで話している。そして、次に語るエリュクシマコスの話であるが、この人物もソフィストを心酔しているだけあって先の両者の意見を肯定して、そしてまとめを述べている。そして彼は「愛の神（エロース）は最大の力を持ち、我々人間に幸福の一切を与え、また我々をして、人間同志の間においてのみでなく、さらにいっそうすぐれた神々とも交わり親しき友ともなりうるように計らってくれるものなのだ。」と述べている。そして最後に彼が述べている言葉に「僕もまた愛の神（エロース）を讃美しながら言い残したこともあると思います。」というのがある。彼等はソフィストに心酔しているのだがその言動、考えのどれも、何となく詭弁という感じがあるような気がする。次にアリストパネースが語っていくのだが、彼はソフィストを皮肉るだけあってその意見は3人の者とはやや違っている。アリストパネースは「善いことを行わせてくれる原因の神として愛の神（エロース）をたたえるなら、正しいたたえ方をしたことになるでしょう。この神こそは、一方現在にあっては僕達の大部分をその本来の状態に導き僕達に深い恵みを施されるとともに、また未来においても僕達に一つの希望を与えてくださる。」と述べている。そして、アガトーンが意見を言う。そして最後に真打ちとしてソクラテスを登場させ、まず彼の考える意見を簡単に書いている。そして、彼は全く違う意見を述べている。

ソクラテスは「愛の神（エロース）についての真実

の話聞く必要があるのかね。しかもなんだよ、そのときの言葉や句の順序など、それこそまったくわたしに浮び放題のもので語られるわけなんだが。」と言っている。

次に、ソクラテスが良く使った問答法がソクラテスとアガトーンの間で使われている。この問答も、以前授業でならったかんじで、相手がソクラテスに対して「このやろー」という感情を抱くものである。そしてこの問答にも最後には、いつもの答えがでてくる。アガトーンは言った。「この僕にはとてもあなたに対して反対意見を出すことはできませんよ。ですからあなたの言ったとおりだとしておけばいいでしょう。」と。しかしソクラテスはいった。「それは私に対してではなく、真理に対してなのだ。」と。この言葉こそ、相手に無知の知を自覚させた言葉だろう。そして、ソクラテスは自分の意見を述べている。これは、プラトンが自分の考え方を代弁させているのだが、その後、アルキピアデースという人物が、この宴に乱入してきて、そしてまた色々な意見を述べあって、そしてアルキピアデースがソクラテスを讚美しながら、この話は終わっていく。形式や内容は以上のことだが、この本でとくに重要な部分は、ソクラテスの語った部分である。もし、他にこの本を読む人がいたら、ここを見落さぬようにしてもらいたい。



2 「饗宴」の感想

まず、なぜ僕がこの本を選んだのかを書くが理由は単純なことである。近所の本屋にプラトンの本は2冊しかなく、そのうちの1冊を適当に選んだのが最初であった。このような感じの本を僕は今まで読んだことがなかったので、なかなか読む気がおこらなかったが、勉強になったというよりは、おもしろかったという印象の方が強い。

この感想では特に僕が強く感じた部分だけ抜きだして書いていきたいと思う。

まず、やはりソクラテスとアガトーンとの問答が、1番だと思う。ソクラテスには授業で習ったように問答法というものがあった。これは、ソクラテスの魂の助産術であり、相手に無知の知を自覚させるものであり、自己の探究を満たしてくれる唯一のものであった。この本にもその部分があるのである。初めは、ソクラテスはアガトーンの言ったことをほめている。そしてほめながら二、三質問していくのだが、その結果は前に書いたように、アガトーンに無知を自覚させる結果となる。次に、ソクラテスはディオティーマという女の人と問答をしている部分があるのだが、この部分はソクラテスが、というよりディオティーマという女の人がソクラテスに説得をしている。この部分の問答は非常に長いのでその内容を書くことをやめるのだが、このディオティーマという人は、この部分では神をあらわしていると僕は思う。それは、知者と呼ばれていたソクラテスに愛とは何かを教えることができたからだ。実際、ソクラテスはディオティーマとのやりとりを人々に語った後に次のように言っている。

「以上のことをディオティーマは語り、またわたし（ソクラテス）はすっかり説得されてしまった。そして、そもそも人を神に等しくするという、この美の宝を手に入れるためには、おそらく人間の身にとって愛の神（エロース）にまさるほどの援助者を見つけることは容易ではあるまいと。こう自分でも説得されたものだから、他の人々にもそれを説得しようと務めている。」と。

また、このディオティーマはプラトンの仮の姿ということもできるだろう。プラトンは、この本で自分の考えてる愛のアイデアを述べたかったに違いないだろう。その愛のアイデアをこのソクラテスとディオティーマの問答であらわしているのだ。プラトンの考える愛、すなわちプラトニックラブのことである。

そして、この問答の中で愛とは何かの答がでてくる。その部分を書いてみたい。

ソクラテス：「何ものなのでしょう。愛の神（エロース）とは。死すべきものですか。」

ディオティーマ：「いいえ、けっして。」

ソクラテス：「では一体何だとおっしゃるのです

か。」

ディオティーマ：「死すべきものと不死の中間にあるもの。それは偉大なる鬼神（ダイモン）なのです。」

僕は、初めこの部分を読んだとき「何か変だな。」と思った。倫理社会の授業では、ダイモンとは、ソクラテスに聞こえる神の声、それは、ソクラテスの良心の声と習ったからだ。しかし、ずっと読んでいるうちに、この疑問ともいう点を解くことができた。ディオティーマによると、「鬼神（ダイモン）の数は多く種類はさまざまあるのですが、愛の神（エロース）というのもそれら鬼神（ダイモン）の一つにほかならない。」ものらしい。これなら、ソクラテスのダイモンの声も、多くの中の一つだから、わかる。僕には愛というものは、良くわからないが、この本を読んで少しはヒントらしきものが見えてきたように思える。今は、言葉であらわすことはできないが、時を過ごすにわたってそれもわかってくるだろう。もし、機会があれば、プラトンの書いた別の作品を読んでみたいと思う。

「クリトーン」

(プラトーン著・田中美知太郎訳)

2M 笠原利治

まず、この本の内容について書いていこうと思う。この「クリトーン」は、大まかにどのような話かといえば、授業で教わったとおり、監獄にいるソクラテスを、竹馬の友であるクリトンが訪ね、いろいろな方法によって、ソクラテスに脱獄をすすめるが、彼はそれを退けて哲学的立場から彼の生き方の原則に照らし合わせ、結局、脱獄せず死ぬ道を選ぶというものである。

この本は、すべてにわたってソクラテスとクリトンとの対話の形で書かれている。まずは、クリトンが夜明け前にソクラテスを訪ねるところから始まる。そして、ソクラテスにある知らせをするのである。その知らせというのは、例の船（これはアテナイ人が、毎年毎年デーロス島の聖地にむけ、その船で祭典使節団を派遣し、この船が出港した後、帰港するまでは公の死刑は一切行なわれないというもので、ソクラテスは裁判後は、すぐに死刑にさせられなかったのである。）

が、今日帰ってきて、ソクラテスの命も当然明日で終わりというものであった。しかし、その知らせをきいたソクラテスは動揺もしなければ驚きさえしなかった。むしろ彼は、それを「それはありがたい合せというもので、そうであるのが神々の御意にかなうことなら、そうあってほしいものだ。」とさえ言っているのである。それから、ソクラテスに対する、クリトンの説得が始まるのである。クリトンはまず授業の中の言葉でいうと、「世間の評判」ということについての話を持ち出したのである。「ソクラテスのために金銭を使う気になりさえすれば、彼を救うことができたのに構いつけなかったように思われる。」等と言ったが、ソクラテスは、大多数の者の思わくを気にする必要はないと言って、その言葉を返した。なぜなら、その人たちは、人を賢くすることも、愚かにする能力もなく、彼らの行動はその場かぎりのものだからである。次にクリトンは息子の話を持ち出した。ソクラテスは息子を扶養し教育しなくてはならない義務があるのに、それをほったらかして、自分だけ死んでしまうというのは不正なことではないか、と言ったのである。さらに付け加えて、ソクラテスを思う気持を述べた。これに対しソクラテスは、その好意に敬意を表しながらも、クリトンの意見にまげられることなく、彼の信念を貫き通した。ソクラテスはクリトンの言葉に単に反発するのではなく、具体的な例を挙げて彼を説得した。その結果、「大切なのはただ生きるのではなく、よく生きるということ。」ということに達した。彼らはさらに話を続け、「不正な目にあっても不正の仕返しをしてはならない。」とか、「脱獄とは、国法と国家全体を一方向的に破壊しようとしていることである。」等という話が出てくるのである。以後は、国法とソクラテスとの対話をソクラテスが仮想して話を進めている。

ここまでの話をまとめると、人にとって大切なのは、ただ生きるということではなく、よく生きることなのである。自分がどんな不正をうけても、それを不正によって報いてはならない。つまり、国家に対してはもちろんその通りである。一度国家によって決められた判決がくつがえされることがあるなら、これは国家（ポリス）やその法に対する最大の暴力になるのである。ソクラテスは自らが、生まれ、育ったこのアテナイという国を愛した。よって、彼はポリスによって決められた判決はアテナイの一市民としての義務であると考

え、毒杯をあおぐ道を選んだのである。

以上が、「クリトーン」のだいたいの内容である。



次に、この「クリトーン」をよんでの感想を書こうと思う。まず、ソクラテスは自らの人生の最後の最後まで自分の生き方の原則に忠実であったということは、とても立派なことであると思った。もし、自分がソクラテスの立場にあるとしたら、たしかに生き方の原則というのは最後まで貫き通したいと思うが、死の瀬戸際であり、逃げようと思えば逃げられるというのなら、いくら生き方の原則というものが大切であるといっても、やはり死ぬのはいやだから逃げようとするだろう。ソクラテスにクリトンは色々な形で、脱獄をすすめるが、ソクラテスは一向にクリトンの話を受け入れなかったが、なぜそこまでして、生き方の原則を貫き通さなくてはいけないのが、僕には疑問である。以前、授業で「命あつての物種」というのを教わったが、僕の生き方というのはソクラテスとはちがって、その「命あつての物種」というようなものになると思う。やはり、何事においても命があつてこそ価値があるもので、死んでしまつてはどうにもならないと思う。その点でソクラテスの原則を貫き通すには死ぬことも恐れないというような考え方は、理解しがたい所があると思う。

一方、クリトンの考えというのはよく分かる。竹馬の友ソクラテスには死があるだけだと分かれば、脱獄をすすめるのは友達としては当然のことであると思う。クリトンにはソクラテスを脱獄させることに失敗でもしようものなら、世間の人から非難されるので何としてもソクラテスを説得しようとするが、ソクラテスからみれば、「世間の人はどう言おうと、自分には関係ない。」という考えを持っていて、クリトンの話に応じない。確かに、世間を人の言った言葉が直接自分の人生に影響を与えるというものではない。しかし、やはり現実はそのもいかなないもんだと思う。クリトンもやはり、そのように思っていたのではないかと思う。

「図書室での学生の態度」

4 M 東川浩二

僕は図書室へよく行くが、正直言ってあまり本を借りない。僕と同様、本をあまり借りない学生もたくさんいるだろう。しかしながら多くの学生は昼休みなど図書室へ行っている。僕は暇な時、「図書室へ行こう。」と友達を誘ったりする。そして、図書室で本をポーと眺めている。辺りを見ると僕のように本を読むことを目的としない学生が多く、本棚の陰で寝ていたり、友達と話しをしている人がいる。図書室で不愉快なのは、まず、友達と大声で話している人がいることである。また、見苦しいのは、菓子とかアイスを食べている人である。彼らは、図書室では食べ物を食べてはならないことを知っているのだろうか。次に、最近迷惑だと思うのは、本棚と本棚の間に座って本を読んでいることである。この人達がいて、とても本が探しにくい。これらのこと、まわりから見て迷惑となる行為は当然のことながら慎むべきである。

また、いざ本を捜そうとしてみても見つからないことがある。その理由は、本を読んだ人が元の位置に本を収めていないからである。本をやっと捜して借りても、本にアンダーラインが引いてあることがよくある。図書の本と自分の本とを認識できない人がいるのだろう。そして、もし借りた本にアンダーラインが引いてあったら、消してから返すという親切な気持ちも持たいたいものである。色々細かい事を言ったが、最近、マナーの悪さを感じているのは僕だけだろうか。

小説のこと

5 A 貞岩雅彦

小説は面白くなくてはいけない。最近面白い小説があまりにも少ないので特にそう思う。何故面白くないのか。ストーリーが平凡で登場人物がどこにでもいるような奴だからだ。元来、小説とは突拍子もない面白さが原型なのである。だいたい2千年の昔から「聖書」

がたくさんの人々に読まれているのは単にキリスト教の聖典だからではない。その話の荒唐無稽さが面白いからである。例を上げてみれば、神は「光あれ」と言われた。すると光があったとか、アダムは130歳になって自分をかたどり、自分の形のような男の子を生み、その名をセツと名づけたとか、常識はずれの話が際限なく出てくる。自分のような男の子を生むなどというのは今で言うクローン人間ではないか。「聖書」の作者は、現代ならSF作家になれるのではなからうか。というように、人々によく読まれる本というのはいかばかりのほら話なのであって、そうでなければ小説とは言えないのである。又、文章の平明さということも、面白い小説の大きな要因である。仏教の「仏典」などというの、日本ではお経となって多くのお坊さんに読まれているのだが、実際に聞いてみるとなんのこやうやらさっぱりわからない。しかしもとの「仏典」と言えば、お釈迦様の一般大衆への説法を記述したものであるからそんなに難しいものではなかったのだ。それを、馬鹿な中国の学者が中国語に訳す時にわざわざ難しい言葉で訳したので、日本ではあんなにもわけがわからないのだ。この「仏典」の例でもわかるように、難しい文章は面白くないのである。もっとも、もとの「仏典」が面白くないかと言えばやはり面白いのである。こんな話がある。お釈迦様の所へ人を大勢殺した山賊がきて教をこうた。そこでお釈迦様は山賊に言った。悔い改めれば罪は許されるよと。相当いいかげんな話である。しかしその無責任さが面白いのである。

このように、小説が面白くなければいけないわけを書いたのだが、今度は実際に面白い小説を少し紹介してみよう。

「幻魔大戦」(平井和正 角川文庫)

「真幻魔大戦」(平井和正 徳間ノベルズ)

「グイン・サーガ」(栗本薫 早川文庫)

「兎の眼」(灰谷健次郎 新潮文庫)

はじめの「幻魔大戦」は全二十巻であり次の「真幻魔大戦」は全15巻で、この2つは姉妹編でもあるので2つ合わせて35巻と考えてよいだろう。この2つの小説は合わせると日本で一番長い小説である。もっとも「幻魔大戦」1つでも日本で3番目なのだが、この2つの小説は両方とも東丈あづまじょうという主人公が救世主へと成長していく物語である。

「グイン・サーガ」といえば全100巻の予定で只今21巻まで出ているという日本で2番目に長い小説である。そしてなんと主人公は豹の頭のおじさんで、話は彼の英雄譚である。ちなみに一番長いのは山岡荘八の「徳川家康」全26巻である。

どうして出てくる小説が全部長いのと聞かれそうなのだが、それは私の好みなのであり趣味なのである。長ければいいというものではないのだが、長いと密度が濃くて面白い文章が書けるのは確かである。例えば「幻魔大戦」では20巻で1年しか時間が流れていない。更に言えばその中の1冊では2時間しか時間経過がなかった。平井和正はその文章の濃密さで面白い小説を書くのである。

「兎の眼」は小学校教師のバイブルと呼ばれているらしい。この小説の教師と生徒の关系到私はとても感動してしまった。こういう教師がいればという理想がここにあるのである。我が身の不幸を呪うばかりだ。(ほんの冗談である)

これらの本は絶対に面白い。私が保障する。読んでみなければ面白さはわからないから、まずは本屋に行って買って来て読むのだ。なに、面白くないだと。それは君が悪いのだ。この文が最初から私の独断と偏見に満ちているのに気が付かないのが悪いのだ。しかし、私の文がまともでないのと、紹介した小説が面白いのは関係ないのだ。だからこれらの本を読んで欲しい。それは君に愛と希望と勇気を与えてくれるであろう。(まるでCMのようだ)

(付記、最初の男が子を生んだ話なのだが、私は神秘主義者であってそういう無茶苦茶な話を素直に信じてしまうのである。)



'85 ワールドカップマラソン

教務主事 堀 武 夫

近頃は、ワールドカップの名称をつけて開催するスポーツの大会が氾濫していますが、マラソンのワールドカップ大会を去る4月13日(女)・14日(男)の両日広島で開催しました。この大会のことで少し書けということですから、テレビや新聞等に報道されていない事柄を中心にして少し述べることにします。私は現在、広島県陸上競技協会というこの大会を実際に手懸けた団体の理事長をしています。大会前の半年間は、学校の勤務もなおざりになり大変迷惑をかけました。ですから大きな声で話をするにはかなり抵抗を覚えるわけで、従って小さくなって小さな声でボソボソと書いてみます。

世界平和の原点広島で開催

このマラソン大会は、過去わが国で度々開催されている国際マラソンとは全く開催基盤の異なった大会でした。

オリンピックの翌年と前年に開催する2年に1回の、文字通りマラソンの世界選手権を開こうということになり、当初ロンドン・ウィーン・モントリオール・バッファロー・ソウルなどが立候補し争奪合戦を演じて

いたわけです。ところが急転直下、1983年11月世界で初めての第1回大会を日本で、しかも世界平和の原点である広島でやってはどうか、ということになりました。私たち関係者は寝耳に水のことで大変驚きました。

正確には、1984年7月ロスで開催された国際陸上競技連盟の総会に私も出席して決定されたものです。

世界で一級品のコース

広島市内にはマラソンの公認コースはありませんでした。ましてや国際公認のコースをつくらねばならないのですから大変頭の痛いことで、県営グランドを発着点とした宮島街道と、呉街道または54号線の利用を考えましたが、いずれも長時間の交通規制がネックとなり、結局西広島バイパスのある宮島街道を選ぶことになりました。ただし、このコースは少し距離が不足しますので、西部商工団地のなかや旧市内百米道路を経由して城南通りをコースに組み込むことにしました。市民球場をスタートとゴールにせよという案や、紙屋町から相生橋を通り平和公園あたりを通す案もありました。このコースの最終決定はアメリカから国際技術代表が来広して決めたもので、彼の評価は世界一の折紙をつけてくれましたが、大会ではその通りの大記録が生まれました。

ロスのオリンピックのコースも、深尾さんが見事に優勝したユニバ神戸大会のコースも起伏が大きく一本道ですが、広島コースは往復路が大部分でアップダウンは橋の部分で最高5分程度、この程度は選手にとつ



先頭グループ 一団となって折返し点を通過

って変化があってよかったという評価でした。

住民参加のイベント

この大会の特徴的なことは、広島地域住民が私たちが手で成功させようという、これまでの国際大会にはみられない住民参加のイベントでした。

コンパニオンを募集したら15人の定員に353人の応募があり、いずれ劣らぬ理知的な美女ばかりで甲乙つけ難く、結局通訳要員を含めて約50名をお願いするという嬉しい悲鳴をあげました。

成功させる会は約160団体、3,500万円の支援があり、また開催前1週間はコンパニオン・通訳・縣市職員・大学生アルバイト等「影のランナー」として運営に協力いただいた人が約1,000人、さらに大会前日から当日にかけての3日間は市民団体約2,500人、同じく警官約2,700人、競技役員約800人、その他報道関係や医療活動への協力者を合計すると、約8,000人の方々にお世話になったこととなります。

困った話

その1、世界各国に要項を送り各国3人エントリーのほか別に2名まで受付けたのですが、大会2日前のこと、何の連絡もなかった国の選手が一人、ホテル(選手村)にチャッカリ部屋をとって寝ていたのにはビックリしました。結局走らせましたが、のどかなものでした。

その2、女子は116名スタートしましたが気象条件も悪く、また未熟な選手もいたためリタイヤが相次ぎ、私は次々に入ってくる電話の対応と、その指示に神経をすり減らされました。

なかでも選手の一人がレース途中で行方不明になり、もしや倒れているのではないかと八方手をつくしましたが、何のことはないタクシーでホテルに帰りシャワーを浴びて涼しい顔をしているのがわかったのは、かれこれ2時間も後のことでした。

その3、コースになった道路はコンクリート部分が多く、倒えば百米道路も選手の走る左側だけをアスファルト舗装にしてもらいました。空港通りはドブ川を埋めて、片側一車線を二車線に、その他沼田道路から商工センター内への開通も急いで完成していただきました。このように道路工事、植樹等膨大な経費を投入して次々とコース整備が進められました。しかし大会直前、コースの再点検をしたところ予定されていなかった分離帯に植樹されていたため、反対車線を走るこ

とになっていたテレビカメラ車は、その部分だけ選手をカメラでとらえることが出来なくなり、慌てた一幕もありました。

その4、女子は5キロ地点で先頭と最後尾が3分もあり、全体的にスピードが遅く選手も少数でしたから、各関門(5キロ地点)における順位とか記録には失敗がありませんでした。しかし一転して男子は5キロ地点を1分42秒の間に235名の選手が一団となって通過しました。予測されたことですから、VTR等カメラやすべての機器を動員して対応したわけですが、突風の如く走り去った後、その再生作業を含め、すべての選手の順位と時間の集計にかかわった審判員が30名、正確な結果が出たのは5時間も後のことでした。

その5、記録の整理は、各関門を通過した選手のゼッケンと時間を報告してもらい、本部ではIBMの全面的な協力を得て集計しましたが、10キロ地点以後は誤りが多く、修正に修正を重ね、B4 76頁の記録集計表が出来上がったのは、その夜も明け午前4時半でした。広島発6時50分の新幹線で帰国する第一陣にやつのことで間に合ったものです。

いずれにしても大成功に終わった、と言われるこのマラソンは「物・金」優先の考えから脱して無形の価値への志向が目立ち始めた文化の時代にふさわしいイベントでした。

教育を「充電」だとすれば、文化は「放電」であり「心の遊び」だとも言えるわけで、住民参加による国際交流を通じ、個人の意識高揚への役割を得たとすればこの上なく幸であったと思っています。

(1985-9-5)



堀 先生 (by Y.S.)

「本を選ぶ」

機械工学科 鍋本 暁 秀

先日、ある数値計算の本を求めて広島へ出かけたことがあった。その本は10年も前のものであるが、ある事情で再び求めたくなったほどのいい本である。ところが、積善館、金正堂、丸善、広文館、紀伊国屋とめばしい本屋を歩いてみつけることができなかった。そこには、最近の本が所せましと並べられているだけであった。祈るような気持ちで最後におとずれた、東広島市の広大生協書庫部でみつけたときは感激であった。最近の本の多さは、あの戦中戦後の欠乏時代を経験している私にとっては信じ難いほどである。にもかかわらず、いい本にはなかなか会えないのである。

私が広島市の中学に入学したのは第二次大戦も末期に近い昭和19年である。参考書を求めて本屋に出向いても、物資欠乏のためであろう、ほとんど新しい本は並んでいなかった。このため古本屋を廻ったものである。ところが昭和20年のピカドンは、たのみの古本屋も全滅させてしまった。本屋を忘れた月日が、その後2年も続いたであろうか。再建された学校近くの本屋に新刊が入ったという知らせがあったのは、昭和22年も夏頃であったと思う。紙質の悪い本であったが、戦後初めての新刊を手にして感動したことを覚えている。その後数年にわたる私の学生時代は、まだ手に入る本は少なく、到底本を選ぶという状況にはなかったのである。

戦後40年のいま、経済大国の町々には本があふれている。ひと月も本屋にごぶさたすると本の並びが変わっているほどで、まるでコンベヤに乗って本棚を通り過ぎて行くかのようなようである。本が多過ぎて、どれにすればよいか迷うほどである。歯ごたえのあり過ぎるものからそうでないものまでさまざまあるなかから、ともかく選び出さねばいけないのである。私は本を2種類に分類することになっている。一つは、部分的に拾い読みをする本で、必要なところを参照する資料の役割をする。一つは、じっくりと精読する本で、考え方を学ぶ本である。私が本を選ぶのは主として本屋の立ち読みによってである。なかでも、精読する本をじっくり

と選んでいる。私の選択基準は、よくわかるという点にある。言葉をかえれば、読者に理解させるために著者が心をくわいている様子がわかる本である。それは、著者の情熱がこちらに伝わってくるような本でもある。こういう本は、ていねいに精読したくなる。また、さまざまな書き込みをして理解の足あとを残したくなる。

いいものに出会えば、物を見る目ができるのは確かである。しかし、その気がなければ見れども見えずということも確かである。つまり、その気からすべてが始まるのである。コンベヤに乗っているかのごとく通り過ぎて行く本の群をみると、いいものを選びとる気持ちを常日頃もちつづけることが大切であると思う。そうすることが、文化を継承し育てて行くことにも通じると思う。



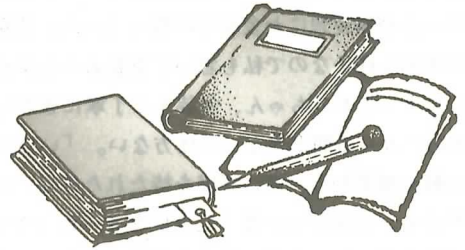
鍋本先生 (by 5 M 八城幸信)

「私とツンドク」

土木工学科 藤原章正

大学に入学して1ヶ月もたたないある日、たしか技術論Aとかいう講義だったと思う。やたら広がってきた教室でM教授が言った言葉が私の読書感を変えてしまった。M教授は科学技術論という得体の知れない分野で技術教育を志した著名な方だった。彼が言うには「読書はツンドクでいい。一般に言われる名著や専門書を半ば義務的に読破していくには時間が足りない。諸君は必要な時に必要な本を許された時間内で読めばいい。でも必要な時に本が身近にないと大変だから、本はできるだけ買って部屋に積んでおけ。青春時代はこのツンドクが大切なんだ。」だそうで、一言一言が流暢で説得力があるもんだから、18才の私には何か新しい発見でもしたような感激を覚えさせられたものだった。生まれつき応用力に長けた私は——人はひねくれているという言葉でほめてくれる——早速、M教授の教科書をツンドクしておくことに決めた。それ以来この講義には代返屋に任せて出ず、レポートを提出して単位をもらった。大学という所は、教授と学生の知恵を駆使したかけひきの場であるから、当時私は勝ったとひとり悦に入ったものだった。後で考えてみると、M教授もしたたかなもので、結局私は2,300円もの大金をはたいてM教授の書いた著書を買ったのは事実で敵の知恵にはまっていたのである。いずれにせよ、私にとってツンドクは共感できる読書法であり、学生時代の6年間は専らこのツンドクに走った。今は亡くなったM教授に私は今でもよく感謝することがある。

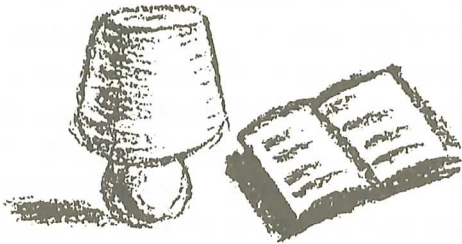
私のツンドクの中で最も印象に残っている本は、土居健郎の「『甘え』の構造」である。日本の社会、文化の中に潜在する甘えについて具体的にわかりやすく説いている。もっとも、印象に残っているのは内容に酔ったためでなく、生まれてはじめて古本屋で買った本だったからだ。ツンドクを始めて1年半くらい過ぎた冬のことだった。クラブ活動に追われて勉強するでもなく彼女もいない私は、本通り商店街をぶらぶら歩くことが休日の日課だった。アベックを見て「ブスだ。」とか「俺の方が恰好ええのに。」と勝手に批評しては満



足していた。それでも時に、どうひいき目に見ても私の負けになる美カップルに会った日は健康状態が思わしくなくなり、帰って寝ることになった。その日は、私の勝利が多く機嫌のすこぶる良い日だった。運よく独りで歩く美女を見つけた。スラリと長身で肩まで伸びた髪がなんとも美しかった。ロングヘアに見落れて後をついてゆくうちに、彼女は角の古本屋に消えてしまった。それまで私は古本屋なるもの一度も足を踏み入れたことはなかった。テレビで見る古本屋にはきまって黒縁めがねのおっちゃんがいる、少しずれたレンズの上からぎょろりとした目を光らせていて、客もきまって青白く痩身で七三カットの銀縁めがねだから、私にはとても縁のない別世界に思えたのだ。困った。でもここで帰るのはもったいないし、第一古本屋に負けることになるのはしゃくだ。腹を決めて入ると、ほこりをかぶったような本が乱雑に積まれていて、表のにぎやかさとはうって違って静かで緊張感が漂っている。ジェットコースターに乗って動き出す前のあのいやな瞬間に似ている。奥に入ると案の定テレビのおっちゃんがそろばん片手に腰かけていた。思わず嬉しくなるとふっと笑うと平静をとり戻すことができた。早速彼女を捜すことにした。あたりを見廻しても見当らない。狭い部屋なので見失うわけがない。2階に上がってみることにした。本には目もくれずきよろきよろする私に、おっちゃんはきよんとした顔をしている。2階には中年風の風格のそなわった紳士と彼女がいた。ほっとして本を眺めていると、ロックとかヒュームとかかかつて教科書で出会ったことがあったような活字が連んでいてめまいがしそうなようになった。彼女は何やら厚そうな本を2冊手にして、どちらがいいか悩んでいる様子で、きつとレポートを書くためのトラの巻にするんだなどはしたくない想像をした。私も負けず3

冊を手にしたが、もちろん内容には目もくれなかった。彼女が決心して下りてゆく姿を見て、私も一番薄そうな本だけ持ってあわてて1階におりた。レジではおっちゃんが無愛想にお金を受け取っていた。彼女はもう店を出る様子なので私も急いで支払おうとすると、よりによっておっちゃん、包装をご丁寧にしちんとするものだから時間がかかって仕方ない。「いいですよ。」と軽く微笑むと、逆に好感を持たれたのか「せっかくだから」とかえってゆっくりになる。おつりをもらって出た時には、すでに彼女は消えていた。「おっちゃん。」と小さくつぶやいて包装紙をやぶいてやった。「『甘え』の構造」と表紙にはあった。

「『甘え』の構造」ももちろんツンドクだった。大学4年の初夏、大学院進学を希望していた私は、入学試験を前に少々焦っていた。しかし、忙しい時になると本を読みたくなくなるという変な習性を持っていて、「『甘え』の構造」を読むことになった。文章も内容も私には丁度手頃で、2日間勉強もしないで読みふけていっそう試験に焦りを寄せるはめになった。内容の良否はともかく、気ままに買って思いのまま読むこのツンドクは、私の性格に合っていると思った。



余談だが、この「『甘え』の構造」を大学院時代の友人Kに貸したことがある。数日後、Kは尊敬の眼差しで私に礼を言った。「この本のお陰で目が覚めた。人生観が変わりそうだ。お前の本棚を一度見せて欲しい。この種の本を紹介してくれ。」私はまさか古本屋のエピソードを説明するわけにもゆかず、ただあまりにKが真剣なので、「心理学畑のこういった本は、自らのフィーリングで選ぶものだ。本との出会いこそ意味があると思うぞ。」なんて評論家気取りで言った後、「角の古本屋はなかなかいいよ。」とだめを押してやった。かつて、幾度も味わったことのない爽快な気分だった。この時以来「『甘え』の構造」は私の切り札となり、「最近読んだ中で、最も印象に残った本は。」と

聞かれると胸を張って「甘え」の……と答えることすでに3年近くになる。

私のツンドクの中に英語情報誌「Time」がある。世界各国の内外情勢やイベントを毎日シリーズで取り上げた雑誌で、日本で発行されているので安く愛読者も多い。お世辞にも英語が得意とは言えない私は、もちろん見出しと絵写真を眺めるだけだが、他人の敬意を奪うには格好の道具だ。

「Time」との出会いも不純だった。1983年の8月1日に発行されたものは、「日出づる国 Japan」についての掲載だった。当時私には彼女（自分ではそう思っていた）ができていて、その彼女が教育学部の英語専攻なものだから、恥をかかないよう横文字関係の情報には、小説、音楽、スポーツ、政治などあらゆる方面に神経を尖がらざるを得なかった。他人にしかも女性に赤っ恥をかくなんて、必須単位を落とすより屈辱に思えたから必死だった。そこでこの「Time」のことを知り、彼女を連れて得意気に本屋に走ったのだった。それから2年余りになるが、今まだツンドク中である。

「Time」のツンドクのお陰で大変な危機に立たされたことがある。大学院1年の春、私が「Time」愛読者であるという噂が研究室の中で広まった。私も見栄の塊だから、この噂に気を悪くするわけではなく、周囲の視線に鼻高く酔っていた。噂が広まる時は速いもので、数日後には研究室の教授にまで届いてしまったのが悪かった。翌日からのゼミでは、教授は日本語をしゃべってはくれず、英語で何やら質問をする。私は立場上黙秘権で通すわけにもゆかず、名詞を駆使して挑んだが結果は明らかだった。如何せん語彙力が極端に乏しく、「Travel demand understand not easy difficult…」とこんな具合だった。友人どもの冷やかな視線に、「ちっぽけな友情なんて。」と思った。

さらに不運なことに、私に英検を受けさせようという雰囲気の後輩から湧き上がった。どうやらとことん恥をかかせたいらしい。私のプライドの高いのを読んだ巧妙な手だと敵ながら感心した。英検2級は高卒程度のレベルだから私にとっては難関だった。高校の時、でる単を怠けたのが時に及んで恨めしかった。でる単だけはツンドクが効かなかった。運よく1次・2次とも合格して、辛うじて最後の面目を保てたが、どうも不合格になるのが珍しい試験らしい。

現在も時にでる単片手に英単語の暗記をするが、こ

の醜癖も「Time」のツンドクのお陰だと思つと、あのM教授の言葉に感謝してしまうのである。



藤原先生 (by 5C 平野基孝)

図書委員会からのお願い

図書委員会では、図書だよりに掲載する原稿を募集しています。読書感想文、読書に関するエッセイ、図書室への希望、イラスト等を、図書委員または図書係へお寄せ下さい。学生諸君の投稿を期待しています。また、図書室に備えられていない本、雑誌で、読みたいものがありましたら、申込み用紙が図書室のカウンターに常備されていますので、書名等を記入して投書箱に入れるか、直接図書委員まで申し出て下さい。

なお、本年度の図書委員および図書係は以下のとおりです。

図書主任	建築学科	藤井 健
図書委員	一般科目	川尻 武信
〃	〃	小山 通栄
〃	機械工学科	河野 正来
〃	電気工学科	鈴木 信也
〃	土木工学科	石井 義明
〃	建築学科	岡本 二郎
図書係	係 長	土佐 智義
〃		石間 悦子
〃		金川 洋介

新着図書案内

(昭和60年1月～7月受け入れ図書室備付分)

> 0 総 記 <

- 学問の創造 (福井 謙一) 佼成出版社
- 第2種情報処理試験プログラム編 (受験振興会) 啓学出版
- コンピューター用語の基礎知識 (酒井 重恭) 共立出版
- ニューメディアの逆説 (粉川 哲夫) 晶文社
- 入門ノ皆伝ノ日本語 d BASE II 奥義書 (真鍋 俊之) 学習研究社
- 読書人読むべし (百目鬼恭三郎) 新潮社
- 新・図書館学ハンドブック (岩猿 敏生) 雄山閣出版
- 日本書誌の書誌・人物編1 (天野敬太郎)

日外アソシエーツ

- 〃 ・主題編II 〃 〃
- 日本件名図書目録 1-11 〃
- 翻訳図書目録 1-3 〃
- ブリタニカ国際年鑑 1985 T.B.S.ブリタリカ
- 大図典View 講談社
- 日本大百科全書 1-4 小学館
- 朝日年鑑 1985年版 朝日新聞社
- 中国年鑑 昭和60年版 中国新聞社
- 朝日選書 朝日新聞社

- 256: ホロコーストの子供たち
- 257: なぜ世界の半分が飢えるのか
- 258: 型の日本文化
- 259: 百代の過客(上)(下)日記にみる日本人
- 261: 近代日本の異色建築家
- 262: 日本人と木の文化
- 263: 天の科学史
- 264: 日本人の起源
- 265: ユダヤ人(上)(下)
- 267: ドキュメント自治体汚職
- 268: 澄んだ湖をつくる
- 269: 物語・日本人の占領
- 270: シャガール
- 271: 脳卒中リハビリ日記
- 272: 女の戦後史II
- 273: イスラム・スペイン建築への旅
- 274: 岡倉天心
- 275: 思想を織る
- 276: 高野長英

岩波グラフィックス 岩波書店

- 27: マヤー古代から現代へ

- 28: カラバゴス諸島
- 29: 鎌倉の仏像文化
- 30: 上高地
- 31: 色鍋島的美
- 岩波セミナーブックス 岩波書店
 - 9: ミル「女性の解放」を読む
 - 10: 原始仏典を読む
 - 11: ゲーテ「ファウスト」を読む
 - 12: 現代経済学の考え方
- 新訳漢文大系 明治書院
 - 25: 書経(上)
 - 55: 淮南子(中)



> 1 哲 学 <

- 哲学への招待 (竹田 寿恵) 地湧社
- 新・岩波講座・哲学1, 5, 7 岩波書店
- ギリシアの哲学 (エミールブレイエ) 筑摩書房
- キエルケゴール憂愁と愛 (橋本 淳) 大文書院
- 現代心理学 増補 (藤永 保) 筑摩書房
- セルフ・イメージの力 (高橋 定男) 日本健康増進研究教育部
- エゴグラム (ジョン・M・デュセイ) 創元社
- カウンセリングを語る(上, 下) (河合 隼雄) ♪
- インナモラメント〈恋愛の発見〉 (F・アルベローニ) 新評論
- 教育工場の子どもたち (鎌田 慧) 岩波書店
- サークル活動の理論と実際 (神谷 国善) 新日本出版社
- 自分を育てる言葉 (小橋 邦彦) 産業能率大学出版部
- 人づきあい50の名言 (三国 一郎) 講談社
- 易と日本の祭祀 (吉野 裕子) 人文書院

> 2 歴 史 <

- 世界現代史
 - 34: ラテンアメリカ現代史 2 山川出版
 - 国史大辞典 5 吉川弘文館
 - 戦後史資料集 (塩田庄兵衛等編) 新日本出版社
 - 師団長・石原莞爾 (奥田鑑一郎) 苧容書房
 - 西洋人名よみかた辞典 1-3 日外アソシエーツ
 - 安芸毛利一族 (河合 正治) 人物往来社
 - エーリッヒ・フロム (Funk Rainer) 紀伊国屋書店
 - 越州沙門良寛 (北川 省一) 恒文社
 - 坂本龍馬 旺文社
 - 最新総合大地図 小学館
 - 角川日本地名大辞典 3, 30 角川書店
 - 日本歴史地名大系 44 平凡社
 - 日本大地図帳 ♪

> 3 社会科学 <

- インド人力宇宙船 (蛭川 真夫) 朝日新聞社
- 東南アジアと中東 (林 理介) 勤草書房
- 現代のドイツ 4-5, 9 (大西健夫編) 三修社
- 21世紀は警告する 1-6 日本放送出版協会
- アントロピーの法則 1-2 (J.リフキン) 祥伝社
- 岩波ブックレット 40-46 岩波書店
- スペインの紅いバラ (野々山真輝帆) 白水社
- 部落史をどう教えるか (稲垣有一等) 解放出版社
- 都市の復権と都市美の再発見 法政大学出版局
- 経済記事の見方 日本経済新聞社
- 中東情勢と石油の将来 東洋経済新報社
- 総合商社 (井上 宗迪) プリタニカ
- 対応力 (藤田 忠司) 実務教育出版
- 国際ビジネスの24時間 (小林 薫) ♪



おのれが燃えろ (大山 梅雄) 学 習 研 究 社
 新入社員諸君へおくるビジネスマン入門 中央 経 済 社
 日本国勢図会 1985年版 国 勢 社
 日本人って何だ (毎日新聞社会部編) 三 修 社
 「日本人論」の中の日本人 (築島 謙三) 大 日 本 図 書
 「坐」の文化論 (山折 哲雄) 講 談 社
 日本の住宅革命 (早川 和男) 東 洋 経 済 新 報 社
 仕事も子どもも (A.ローランド等編) 勁 草 書 房
 少年非行学 (山口 透) 有 信 堂 高 文 社
 美しく愛に生きる (長沼 雅美) 講 談 社
 「教育」の同時代史 (山住 正己) 平 凡 社
 図解実験観察大事典 物理 東 京 書 籍
 造形美術教育大系 7 美 術 出 版 社
 風俗の社会心理 (井上 忠司) 講 談 社
 シキタリがわかる便利雑学事典 (加太こうじ) 日 本 実 業 出 版 社
 民族民芸双書 93-95 岩 崎 美 術 社
 人間は何を食べてきたか 日 本 放 送 出 版 協 会
 おおさかの民家 (杉本 尚次) 駸 々 堂 出 版
 霊柩車の誕生 (井上 章一) 朝 日 新 聞 社
 パラオの神話伝説 (土方 久功) 三 一 書 房

> 4 自然科学 <

幕末の洋学 (中山 茂) ミネルヴァ書房
 日本の科学技術100年史 (上, 下) (湯浅 光朝) 中央 公 論 社
 科学の事典 第3版 岩 波 書 店
 科学大辞典 (国際科学振興財団編) 丸 善
 マグローヒル科学技術用語大辞典 第2版 日 刊 工 業 新 聞 社
 自然学の提唱 (今西 錦司) 講 談 社
 身近な科学あそび (N.D.アンダーソン) 東 京 図 書
 私の数学勉強法 (吉田洋一等編) ダイアモンド社
 数学者の言葉では (藤原 正彦) 新 潮 社
 若き数学者のアメリカ () 〃
 数学で何を学ぶか (森 毅) 講 談 社
 数学ライブラリー 教養篇9 森 北 出 版
 たのしい物理の国 (ヨシフ・ペレツ) 東 京 図 書
 物理学 One Point 26 共 立 出 版
 26: 電磁誘導 共 立 出 版
 楽しい科学 (三浦 基弘) 東 京 図 書
 レーザーとその未来 (エヌ・ソボレフ) 〃
 化学の基礎 (谷崎義衛編) 丸 善
 大学教養 化学 (富田 功) 裳 華 房
 現代化学史 1-3 (A.J.アイド) み す ず 書 房
 化学辞典 (志田正二等編) 森 北 出 版
 化学One Point 共 立 出 版
 12: 活性化エネルギー 共 立 出 版
 基礎物理化学 第2版 (今堀 和友) 東 京 化 学 同 人
 実験をとおして知る物質の性質 (錦抜邦彦等編) 講 談 社
 分析機器要覧 (武藤義一等編) 科 学 新 聞 社
 基礎無機化学 改訂版 (J.D.リー) 東 京 化 学 同 人
 ゲリッシュ有機化学 (J.R.ゲリッシュ等) 〃
 宇宙 (N.ヘンベスト等) 教 育 社
 地球の学校 (J.シュワルツ) 東 京 図 書
 神秘の光オーロラ (小口 高) 日 本 放 送 出 版 協 会
 天気予報の科学 (高橋浩一郎) 〃
 地震の科学 (竹内 均) 〃
 広島県地学のガイド コ ロ ナ 社
 広島の地質をめぐって (鷹村 権) 築 地 書 館
 環境生物学 (E.J.W.バリントン) 森 北 出 版
 おもしろい生物工学 (I.B.リチネッキー) 東 京 図 書
 身近な遺伝学 (N.D.タラセンコ等) 〃
 キリンの首 (F.ヒッチング) 平 凡 社
 NHK 健康百話 1-3 日 本 放 送 出 版 協 会
 人間の遺伝 改訂版 (田島弥太郎等) 〃
 ポップアップヒトのからだ (J.ミラー等) ほ る ぶ 出 版
 アレルギーの話 (池見西次郎等) 日 本 放 送 出 版 協 会



ポップアップ生命の誕生 (J.ミラー等) ほるぷ出版
 人間・気象・病気 (加地正郎編) 日本放送出版協会
 テクノストレス (J.ブロード) 新潮社

土木繊維 (P.R.ランキラー) 森北出版
 わかりやすい土の力学 (今井 五郎) 鹿島出版会
 目でみる山地防災のための微地形判読

< 5 工 学 >

明治のエンジニア教育 (三好 信浩) 中央公論社
 科学技術の最前線 1-3 (三田出版会編)

(大石 道夫) ♪
 土質家験法 (高専土質実験教育研究会編) ♪
 わかりやすい岩盤調査の基礎知識 (小松田精吉等) ♪

ダイヤモンド社
 講座日本技術の社会史 1, 3-7 日本評論社
 科学技術は人間をどう変えるか

コンクリート構造物の維持と補修 (成井 信等) ♪
 わかりやすい土木見積りの知識 (宮原 春樹) ♪

(石井 威望) 新潮社
 「十年先を読む」発想法 (西澤 潤一) 講談社
 英語で読む先端技術 (井上 章) 共立出版
 土木工学概論 (高橋 裕等) 森北出版
 グラフィックス・くらしと土木

土木計画学演習 (吉川和広編著) 森北出版
 ケーソン工法 (白石俊多等) 鹿島出版会
 街並をつくる道路 (J.マクラスキー) ♪
 切手に見る鉄道技術の歴史 (藤井 浩) 土木工学社
 日本のダム事業 ダム技術センター

6: 橋 オーム社
 新大系土木工学 4, 44, 50, 64

水道の文化 (鯖田 豊之) 新潮社
 下水は自然をめぐる (楠本 正康) 第一法規出版
 下水道 (中西 準子) 朝日新聞社
 ヨーロッパの都市再開発 (木村光宏等) 学芸出版社
 世界建築事典 (N.ペヴスナー等) 鹿島出版会
 S D 選書 ♪

(土木学会編) 技報堂出版
 物語 日本の土木史 (長尾義三氏) 鹿島出版会
 土質工学演習 (浅川 美利) ♪
 土質工学 (稲田 倍穂) ♪

20: 日本美の特質
 191: アルド・ロッシ自伝
 192: 屋外彫刻 オブジェと環境
 193: 「作庭記」からみた造園

世界の建築 1, 3, 8 学習研究社
 建築設計事務所の実務 (嶋 富士夫) 鹿島出版会
 日本建築の再生 (石井 和紘) 中央公論社
 建築史の先達たち (太田博太郎) 彰国社
 飛鳥・奈良建築 (鈴木嘉吉編) 至文堂
 平安建築 (工藤圭章編) ♪
 鎌倉建築 (伊藤延男編) ♪
 室町建築 (川上 貢編) ♪
 桃山建築 (平井 聖編) ♪
 江戸建築 (鈴木 充編) ♪
 古代オリエント都市 (P.ランブル) 井上書院
 中世都市 (H.サールマン) ♪
 近代建築ガイドブック 西日本編 鹿島出版会
 近代建築ガイドブック 北海道・東北編 ♪
 日本の建築家 1-2 丸 善
 図解建築構法 (後藤一雄等) 彰国社
 構造力学 2 (村内 明等) ♪
 建築用木材の知識 (今里 隆) 鹿島出版会
 地盤の力学 (吉見吉昭等) 彰国社
 住宅の照明 学芸出版社
 金属製建具の知識 (齋藤 潮) 鹿島出版会



身近な耐震設計法 (前川 陽一) 学芸出版社
パソコンによる建築グラフィックス

(渡辺 仁史) 培風館
実務に即した図解建築測量 (條崎 守) 彰国社
GA Houses 世界の住宅 17, Special 1

A.D.A. Edita Tokyo

採光設計 (日本建築学会編) 彰国社
クルマを一生使い続ける法 (佐々山 晃) 実業之日本社
絵とき初めて電気回路を学ぶ人のために

(梅木一良等) オーム社
ニューメディア用語辞典 第2版 日本放送出版協会
図解VAN入門(日本電気情報サービス編) オーム社
スーパーコンピュータへの挑戦

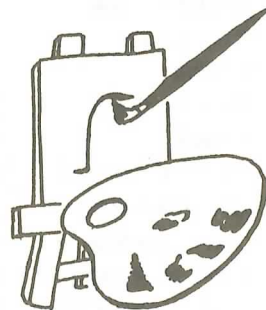
(川合 敏雄) 岩波書店
ロボット制御入門 (大熊 繁) オーム社
新合金 (金子 秀夫) 産業図書
ニューセラミックスの世界 (境野 照雄) 岩波書店
日本の味探訪 食足世平 (安藤百福編) 講談社
コロンブスの目玉焼 (本間千枝子) 〃

> 6 産 業 <

技術の夢 (ウイリイ・リイ) 森北出版
国土利用白書 昭和60年版 大蔵省印刷局
国土の現況とその歩み

(建設省国土地理院編) 日本地図センター

侵食 (ミロス・ホリー) 森北出版
治山・砂防工学 (駒村富士弥) 〃
オリेंट急行 (窪田太郎等) 新潮社



> 7 芸 術 <

岩波美術館 テーマ館12 岩波書店
岩波美術館 歴史館4 〃
街をスケッチする (秋保 正三) 美術出版社
黄金背景テンペラ画の技法 (田口 安男) 〃
デッサンの用具と使い方 〃
ペン画淡彩による建築写生 (田中 薫) 〃
リアルイラストレーション (斎藤 雅緒) 〃
エアープラシ・イラストレーション
(山下 秀男) 〃
文字をつくる (中村 征宏) 〃
土門拳全集 11-13 小学館
レイアウトの実際 (宮崎 健) 美術出版社
現代のインテリアデザイン
(K.フィッシャー) 〃
広島スポーツ史 広島県体育協会

> 8 語 学 <

表現類語辞典 (藤原与一等編) 東京堂出版
日本語と中国語 (陳 舜臣等) 徳間書店
最新中国情報辞典 (藤堂明保等著) 小学館
Color Anchor 英語大事典
(堀内克明等編) 学習研究社
リーダーズ英和辞典 研究社
新和英中辞典 第3版 (市川繁治郎等編) 〃
英語会話続コーヒー・ブレイク
(東後 勝明) 日本放送出版協会



> 9 文 学 <

古典を読む		岩 波 書 店
18: 平家物語		
19: 江戸小咄		
20: 江戸漢詩		
21: 万葉集		
22: おもろさうし		
北の国から 後編	(倉本 聰) 理 論 社	
氷点 正・続	(三浦 綾子) 朝 日 新 聞 社	
水の流浪	(立松 和平) 講 談 社	
サバンナに生きる	(戸川 幸夫) 新 潮 社	
ある戦後	(平井 啓之) 筑 摩 書 房	
せめてこれだけ……	(青木 雨彦) 講 談 社	
完訳 日本の古典		小 学 館
17: 源氏物語 4		
25-26: 夜の寝覚 1-2		
38-39: とはずがたり 1-2		
40: 宇治拾遺物語 1		
44: 平家物語 3		
51: 好色五人女 好色一代女		
54: 芭蕉句集		
司馬遼太郎全集 1-50		文 芸 春 秋
中国古典詩聚花 1-5, 8-10		小 学 館
入門やさしいシェイクスピア		
	(岡田 忠軒) 南 雲 堂	
カフカのように孤独に	(M.ロベール) 人 文 書 院	
愛の諸相	(R.フラスリエール) 岩 波 書 店	
岩波新書 285-306		〃
岩波ジュニア新書 86-98		〃
カラーブックス 661-684		保 育 社

新潮文庫

(1984年版新潮文庫目録の日本文学, 世界文学)
(フランス, イギリス)のうち品切を除くすべて) 新潮社

寄贈図書

書 名	寄 贈 者
島津製作所 百十年史	株式会社 島津製作所
東京工業大学百年史	東京工業大学
(通史, 部局史)	
鳥取工事六十年のあゆみ	建設省鳥取工事事務所
日産自動車社史	日産自動車株式会社
(1974-1983)	
広島市下水道75年史 *	広島市
日立造船百年史	日立造船株式会社
三菱電機福山製作所40年史	三菱電機福山製作所
百間川改修誌	建設省岡山河川工事事務所



編集後記

第13号では、学生諸君から12編、先生方から3編のバラエティーに富んだ原稿を掲載することができました。御投稿どうも有難うございました。また、似顔絵を描いて頂いた方には、御協力を感謝しています。

なお、本号を発行するにあたり、図書だよりをもっと幅広い内容にし、興味深く読んでもらえるように検討がなされました。その結果、アンケート、ブックハンティングなどの企画があげられましたが、本号では、とりあえず見送ることになりました。次号以降に期待して下さい。

(河野、小山)